



Sapporo
education and
culture hall
news

R a k u

67

芸術文化を次世代へつなぐ



子ども演劇ワークショップ

教文演劇セミナー

1985年～1998年

対象は現在とは違い18歳以上の成人。舞台芸術の将来の担い手の育成という目的は、現在まで続いています。



子どものためのオペレッタ・ワークショップ

2004～2015年

オペラ歌手とともに舞台での発表公演だけでなく、オペレッタに必要な衣装や道具作りなど作品のための全てを作るワークショップ。芸術文化を通して、他者との協力や自己実現の楽しさを体験するという子ども事業において通底するコンセプトが確立しました。



音楽劇『わが町』ワークショップ

2016年

現在の子ども演劇ワークショップの初回となる事業。数ヶ月のワークショップを経て、その成果を発表する公演を上演するという方式を確立しました。



夏休み子ども体験新喜劇ワークショップ

13丁目笑学校

2006年～2007年

プロの芸人の養成を目的として始まった教文のお笑いワークショップ。



教文13丁目笑劇一座

2008～2022年

笑いの医学的見地における効能が注目されていたこともあり、お笑いによる地域活性化を目指し地域密着型の市民喜劇集団を立ち上げました。



体験喜劇ワークショップ

2016年

より広く市民に「お笑い」「喜劇」を体験してもらうために始まったワークショップ。



夏休み子ども体験喜劇

2017年

前年に行われた「体験喜劇ワークショップ」を子ども向けに特化させたかたちで実施。当初は小中高生対象でしたが、2018年からは対象を小中学生までとし、更に「夏休み子ども体験喜劇ワークショップ」にタイトルを変え、現在の方式となりました。



小・中学生のための能楽入門

能楽講座

1999年

「型」「装束」「能面」「囃子」と4つのテーマで、それぞれ専門家を講師に招き実施。現在と同じく「能楽を体験することで理解を深め、親しみを持ってもらう」ことをテーマに行いました。



シンプル能

2011年

一般コースとジュニアコースに分かれて開催されたワークショップ。ジュニアコースは小3～中3が対象。



小学生のための能楽入門ワークショップ

2012年

「シンプル能」からジュニアコースが独立。2016年からはプロの能楽師を講師に招き、更に本格的なワークショップとなりました。



歌のお届けコンサート

さっぽろオペラ祭

2007年～2017年

同事業内の企画の一つとして、オペラ団体が市内の学校・病院・高齢者施設へアウトリーチ公演を行っていました。それを始まりとして、小学校を対象にした札幌市の芸術文化推進事業「学校DEカルチャー」のプログラムの一つとなり、現在の形式での取組へとつながっています。



次世代へつなぐ 芸術文化を

【特集】

札幌市教育文化会館（以下、教文）では大人から子どもまで、広く市民に対して文化・芸術にふれる機会を提供していますが、その中でも子どもを対象にした取組は開館当初からさまざまなかたちで行ってきました。

1983年には「子どもの情操教育のための活動」を目的として親子での芸術鑑賞機会を提供。1985年には「未来の芸術文化の担い手の育成」をテーマに『教文演劇セミナー』がスタート。公共施設が舞台芸術を志す若手人材の育成を行うことは、当時としては全国でも珍しい取組でした。『教文演劇セミナー』は1998年まで8期続き、修了生約250名を排出。対象が18歳からの成人であったものの、この事業がのちの教文におけるワークショップや講座といった取組の礎となりました。

1999年からは主催事業にワークショップを冠する体験型の取組が増え、様々なジャンルで子どもを対象にした事業が増えていきました。特に2004年に開始した『子どものためのオペレッタワークショップ』は「舞台芸術に触れるとともに、他者と協力して作品をつくりあげること、また自己実現することの楽しさを体験すること」をコンセプトに始めました。このコンセプトと培われたノウハウは現在に至るまで教文の子ども対象事業に継承されています。

教文は、子どもたちが文化・芸術にふれる機会をつくるだけではなく、彼らが将来の文化・芸術の担い手になり、ワークショップなどを通して自己実現や他者との協調性を身につけるきっかけになると、その場限りの体験ではない「子どもたちのその先」へとつながる重要なものとして今後も取り組んでいきます。



子ども体験新喜劇

開催期間 2026年1月6日(火)、9日(金)、10日(土)



「子ども体験新喜劇」は小学1年生から中学3年生までを対象に「喜劇」をテーマに行うワークショップ。放送作家の砂川一茂氏が講師を務め、開始前に参加者全員でお互いのニックネームを決めてからワークショップが始まります。「アドリブ」「即興」から生まれる笑いを重視するなど、ユニークな進め方で子どもたちの心を掴んでいます。喜劇の面白さを体験しながら演じることを通じ、チームワークやコミュニケーションを学ぶことができます。昨年度は定員を大きく超える応募があり、教文でも人気のワークショップの1つです。



2025年1月に開催したときの様子。本番の発表会では、子どもたちの自由な発想から生み出された「アドリブ」からたくさんの笑いが起こり、会場を湧かせました。



子ども演劇ワークショップ

開催期間 2025年8月24日(日)～11月1日(土)

発表公演 2025年11月2日(日)、3日(月祝)

小学4年生～中学3年生までを対象に開催する演劇ワークショップ。地元の演出家を講師に迎え、地元で活躍するスタッフや俳優とともに数ヶ月の稽古を行って演劇作品を制作し発表公演を行います。今回は、教文だけでなく札幌駅直結で昨年オープンしたばかりの「ジョブキタ北八劇場」との連携が加わってさらに強化。同劇場の芸術監督である納谷真大氏が講師を務め、稽古を教文、発表公演をジョブキタ北八劇場で行います。演劇の制作と発表、それぞれの空間を体験できます。



2022年は発表公演で『イキルニツイテ～猿ヶ島より～』を上演。コロナ禍のため、関係者のみへの公開となりましたが、子ども達は元気いっぱい演技大きな拍手が起こりました。



小・中学生のための能楽入門

開催期間 2025年8月15日(金)、16日(土)

小学3年生～中学3年生を対象に夏休み期間の2日間を使って能の謡や仕舞を体験できる「小・中学生のための能楽入門」。最終日には参加者による発表会も行います。全く能に触れたことのない人でもわかるよう、ワークショップの冒頭で能の基礎知識や取り上げる演目の解説も行うので、自由研究の題材としても好評を博しています。今年度は、初めて仮設能舞台が組まれた小ホールを会場に開催するので、より本格的に能楽を体験することができます。



2023年開催時は教育文化会館が休館中であつたため、市民交流プラザに会場を移して実施。未知の体験にワクワクする受講生が印象的でした。



現在の
子ども
対象事業

子どもたちのその先へと
つながっていく
芸術文化を体験できる取り組み

1977年の開館から長い期間取り組み続け、良いかたちを模索しながら少しずつより進化してきた子ども対象事業。日常では感じる事ができない経験を、芸術・文化を通してたくさん子どもたちに届けています。



歌のお届けコンサート

開催期間 2025年6月～11月

札幌市内の小学校への芸術文化推進事業「学校DEカルチャー」のプログラムとして開催している「歌のお届けコンサート」。札幌市内のオペラ団体がコンサートの企画・出演を担い、子どもたちに聞き馴染みのある曲目を選曲したり、校歌を子どもたちと一緒に歌うコーナーを設けたりと、各校のリクエストに応じてきめ細かくコンサートを実施。それぞれの学校にあったかたちで、オペラのいろはや歌うことの楽しさをお届けしています。オペラ歌手と一緒に歌うこともでき、年々参加学校が増えている人気の取組です。



「どうしたらオペラ歌手になれますか？」などの質問に対して丁寧に説明してくれる出演者。一緒に歌いながら踊る場面もあり、盛り上がりました。

1959年大阪市生まれ。吉本新喜劇」創成期に活躍した作家、竹本浩三氏（元吉本興業文芸顧問）に師事し喜劇を学ぶ。1996年札幌に移住。道内各地で笑いと健康」「職場と笑い」などをテーマに講演。2008年教育文化会館主催事業「教文13丁目笑劇一座」講師に就任。札幌・神戸・大阪を中心に、阪神淡路大震災の教訓から「笑いと癒し」をテーマにした誰にでも簡単に参加出来る「体験新喜劇」の普及に取り組み、2016年より「夏休み子ども体験新喜劇ワークショップ」講師として連続で講師を務め好評を博す。共著「ユーモア的即興から生まれる表現の創発」発達障害、新喜劇ノリツコミ」赤木和重編著（クリエイツかもがわ）



1 講師を務めた「教文13丁目笑劇一座」の公演より 2) 2025年1月「子ども体験新喜劇ワークショップ」
3) 竹本浩三さん(写真前段中央)による笑劇一座のワークショップでの一枚

放送作家

砂川 一茂
すながわ かずしげ



術



化



Art
Culture
Human

07

誰でも笑いを生み出し優しくなれる。
歩み続けて見えてきた笑いのかたち。

「ばく、余命がもう終わってるんです。」満面の笑顔でそう言う砂川さんは教文で行われている『子ども体験新喜劇』で講師を長年勤めている。大阪に生まれ中学生の頃からラジオ番組にハガキを投稿し始めたことで笑いの世界に興味を持ち、大学卒業後には安定した道を選ばず不安定ながらもマスメディアの道へ。安月給でも休みなしで働く中、憧れの作家、竹本浩三さんと出会い弟子入り。その後フリーの放送作家となり一時期はラジオやテレビ番組を10本以上同時に担当。そんな激務がたたり体調を崩したため療養を兼ねて札幌に移住。札幌でも放送作家として仕事を続けた。そんな砂川さんに「北海道独自の笑いの文化を市民に育てたい」という思いから市民参加型の「13丁目笑学校」を主催する教文から講師としてのオファーが舞い込んだ。砂川さんは阪神・淡路大震災の慰問先で、避難者同士の会話が爆笑を起こしている様子を見て「プロじゃなくてもできる喜劇がある」と気づき、放送作家の活動と同時に素人新喜劇という取り組みを行っていたのだ。今では

「子ども体験新喜劇」へと発展し、現在も続いている。砂川さん自身、体験新喜劇は子どもを中心にやっていきたいと言う。正解不正解のある学校の勉強とは違い体験新喜劇には間違いがない。障がいがある子とない子が分け隔てなく関わり笑いあえるインクルーシブな場として子ども達に提供していきたいという。長年放送作家として活動する中でいずれ限界が来ると感じていた砂川さんだったが3年前に末期がんが発覚。あと3年頑張ればいいんだと逆に生きる希望が湧いたと言う。体験新喜劇を通して知った障がいを持つ人々の日常を更に深く知りたいと資格取得後、介護職員として働くことを決意、彼らの普段の生活を知ることは自立支援にも繋がりと、体験新喜劇にもプラスになる予感がしていると言う。

「もし、あの世があるなら喜劇を知らずに旅立った子どもたちと喜劇やりたいんです。すごい楽しみなんです。」そういつて笑う砂川さんは、誰よりも前向きに人生を歩み続けている。

TOPICS.1

屋根付き能舞台 お披露目

令和5年1月～令和6年9月まで行っていた改修工事と同時期に、屋根付き能舞台も改修工事を実施し、去る4月29日（火）の札幌能楽会主催「能楽鑑賞のひとつ」にて、改修後初お披露目となりました。
真新しい木の香が漂う能舞台で鑑賞する能楽は、伝統芸能を味わう中にもどことなく新鮮さがあり、貴重なひとときを味わう空間が広がっていました。
改修された能舞台は、内部構造の部材を軽くて丈夫なものに更新し、作業工程を改善することで、改修以前の能舞台よりも安全かつ効率的に組み上げることが可能となっています。
能舞台は、次回10/29～31の「教文能」で設置されます。札幌で能舞台を間近に見ることが出来るのは教文だけですので、お楽しみに！



TOPICS.2

子ども演劇ワークショップ 初の連携事業

今年の子ども演劇ワークショップは、稽古は教文・発表公演はジョブキタ北八劇場という、今までにない形で行います。それぞれの施設の強みを活かし、施設の垣根を越えて、演劇に興味をもってもらうための取組となります。
発表公演の11月は、ちょうど「札幌劇場祭（TGR）」の季節でもあり、発表公演は、TGRの参加作品になります。両館ともTGRを運営する劇場連絡会のメンバーであり、札幌の演劇を盛り上げようという同じ志を持つ『仲間』なのです。
仲間とともにタッグを組んで行う新たな「子ども演劇ワークショップ」、ぜひご期待ください！

子ども演劇ワークショップ発表公演
「イギリスツイテ ～猿ヶ島より～」

日時	2025年 11月2日[日]	14:00開演
	11月3日[月・祝]	14:00開演
チケット	一般 2,000円	高校生以下 1,000円

9月19日[金]より発売予定

